

三行  
下

四行

寂寥

金子董園

三行  
上

樂堂に寂寥しの曲志つみていかにふゆゆの  
葉窓にみたる、

一行  
アキ

まぼろしの影越えけり夕やみに萩の花  
ちる師が御墓道

〃

夢おから甘き香かきて笑む君にさよやき  
て見よ木犀の花

〃

若らわくの冠あはるる七人にうたの世  
託もまた新あれ

大輪の白きかやして舞はむひとりほ  
しきこの菊の宴(三首、自菊會と周年の記念會より)

花十世の花ハ萎みぬ女樂師のかたみ花か  
め瑠璃色ふりぬ

一段

又文

由

◎道草

○山ぢやます

一

「夕日は深めて 空の画の、

あの遠山の、 何よと名を。」

桑つむ少女よ かく問へば、

「あの高嶺かや、 あれこそは、

言ひさしてあげし つくりごと、

「わしが故郷の 山ぢやます。」

二

「美しい山上、 何よと名を。」

再び問へば、 少女は、

「ホンは美しいの 山ぢやます、

籠もかちへよ つくりごと、

「あの麓よよ、 わしがと、

か・さまいませす 山ぢやます。」

三

「さては、悲ひしの、 さぞや山、

何よとか名をと ねに問へば、

「ホシよ夢ひしの 山ぢやます。」

やさら籠さば 取りあげて、

「桑子の繭よ 成る日さば、

教へて待たろ 山ぢやます。」

四

「やさしの山や 名をきくよ、

残り心よ 見うへさば、

赤き祥の ちちくくと、

「桑の虫歌も 可愛やな、

「少女十六、 花では無いか、

花も萎てましょ、 と、か、故は。」

○子守り少女

一

おどろの奥よ 撫子一枚、

伊よとはなさの 由みさよ、

露ふみわけて 摘みじさば、

子守り少女の うちまかり、

「それほ 撫子 花ぢやます、

あしが背戸の 山へまは、

こゝら数ある 花ぢやます。

ほしうば、取りて まぬら せじ。

二

うれし心の心、そちぢ宿

さては奴知と ほこふめは、

一むら物を 指さして、

「書くはあふし、あそこそや。

あひ山畑と 草とるは、

わしうと、さま か、ぢやます。

此の花よりも うつとさき

野る合もありてよ、うごまませ。

○宿は花や

一

「此の街道と よき宿は。」

畑うつ 籾か く問へば、

「宿をおはすが、宿ならは、

それな本所 花をこそ。

街道きつこの 一ぢ宿、

仙を候め 御存陣、

御定の紋の まん幕さ  
うちしきこえの 花冠こえ。

二

↑ ちかめろおはすか、見晴らしよ。

眺めの街道 階一よ。

背戸み見わたす 八幡は、

近郷一の おん社。

扉の彫りし 金龍は、

名人左り 甚五郎。

仙を候の お涼みの

松の縁より 見えなす。

うわら  
あはれ